

平城宮跡東院地区中枢部の調査(平城第421次)

平城宮の東には南北750m、東西250mの張り出し部があり、その南半部(南北350m)を東院地区と呼んでいます。都城発掘調査部(平城地区)では、2006年度から東院地区の継続的な調査をおこなっており、今回、その中枢部にはじめて発掘調査のメスをいれました。調査は4月2日から開始し、10月10日に終了しました。

調査の結果、少なくとも5時期以上に区分される遺構の変遷を明らかにしました。

奈良時代前半の遺構は、少なくとも2時期以上確認しました。そのうち古い時期の遺構として、2条の南北塀があります。西側の塀列は、東院西半部の区画の東を限る掘立柱塀で、調査区南端で礎石建ちの門に取り付いています。

奈良時代前半のうち新しい時期の遺構として、9間×4間の四面庇の東西棟建物があります。この建物の柱穴は規模が大きく、1辺1.5m～2m、深さ約1.5mもあります(右上写真参照)。さらに、調査区南端の東西棟建物は、北面に庇をもつ少なくとも東西11間(南は調査区外で未検出)の建物と推定されることから、この時期には何度かの建て替えがあったと考えられます。

奈良時代後半の遺構は、3時期確認しました。なかでも、今回の調査で最も注目される成果は、東院地区の中枢部分(内郭)を囲う回廊を検出したことです。今回検出した回廊は、その西南隅にあたります。



第421次調査区全景(西から)



巨大な柱穴跡

回廊は、最も格式の高い区画施設で、平城宮内で確認された事例は、内裏とその周辺・大極殿院に限られています。また、平城京内の検出例は、寺院の伽藍を除くと、現在のところ数例にとどまっています。東院地区が、きわめて重要な区画と認識されていたことは、このことから明らかでしょう。

最後の段階の遺構として、東院南門(建部門)の中心を通り、東院を東西に区分する中軸線上に位置する東西棟建物を確認しました。西隣の第401次調査(2006年)でも、同じ時期の南北棟建物が確認されており、この時期の建物は、東院南門の中軸線上に対し、東西対称に配置されていたと推測されます。これらの知見からすれば、奈良時代後半には、東院の中心建物は今回の調査区の北東ないし北方に展開したことはほぼ確実といえます。

このように、今回の調査成果は、東院地区の大まかな時期変遷が明らかにできたこと、中心的な建物の位置を推定する手がかりを得たこと、以上2点にまとめられます。

文献史料によると、東院には「玉殿^{ぎよくでん}」と称する建物が建てられており、奈良時代末の楊梅宮^{ようばいきゅう}には「安殿^{あんでん}」「閤門^{こうもん}」などの施設が存在していました。これまでのところ、文献史料にみえる宮やその施設と発掘遺構とを直接結びつける手がかりにはめぐまれません。今後の継続した調査により、東院を構成した建物群やその中心施設の発見が期待されます。

なお、本年10月からは、第421次調査区の北東で、引き続き発掘調査をおこなっています。その成果にもご期待下さい。

(都城発掘調査部 山本 崇)